

のときにイメージするものとして、イギリスとかアメリカのような二大政党制があって、それに近いものになっているのかというと、かなり違うのではないかと思います。

一つは、二大政党制の場合には、政権交代するのが前提です。それがいま起こっていないだけではなく、現在のままであれば、次の選挙で起こるかもわからない。そう遠くない将来にBNないしUMNOが分裂して政権交代することがあるかもしれませんが、その後、安定した二つの党派的な集団が権力を交代で担うかたちに落ち着くのかということ、それはどうかと思います。

もしそうだとしたら、対立軸はなんなのか。現在のところなにをめぐって争っているかということ、PR側の主張にしたがえば、基本的には「善い人」と「悪い人」という軸だということになります。PR側が言っていることは、おおざっぱに言ってしまうと「あいつらは悪い」、「我々の税金を自分のポケットに入れている」という一点に尽きます。それは間違いなく正しいのですが、そのあまりにも正しいことばかりが政治の前面に出てきていて、それ以外のことがほぼ議論にならない状態になっている気がします。

かといって、政府をぶっ倒すという話にもなりません。善人が悪人を批判しつづける政治がずっとこのまま続くとなると、それは二大政党制というより、かつて藤原婦一さんが言った「政府党体制下における政府党と在野党」の関係として見るほうがいいと思います。権力を握り続けている悪い奴らに対して、在野の善い人たちが批判して、ある程度のチェック・アンド・バランス的なことを達成するという力関係あるいは役割分担のような構図です。

今後これが続いていくのだとすると、二大政党制のイメージとはちょっと違うかなという気がしています。

質疑・討論

参加者

伊賀司(神戸大学)／加藤剛(総合地球環境学研究所)／
金子芳樹(獨協大学)／塩崎悠輝(同志社大学)／
鈴木絢女(福岡女子大学)／鳥居高(明治大学)／
中村正志(JETROアジア)／西芳実(京都大学)／
山本博之(京都大学・司会)

山本博之(司会) 個別に深く議論したいこともあるかもしれませんが、選挙が終わって間もなく、得られる情報も限られている状況です。それぞれの情報を持ち寄って、どんなことが考えられるかを議論するのがこの研究会の趣旨ですので、一つのことについて深く議論するより、「こんな情報もある」、「こんなことを考えている」、あるいは「どう考えているかを確認したい」といういろいろな論点を出していただくような質疑応答や討論ができればと思います。

■ 登録者数と有権者数、投票率、ファースト・ボーターについての資料状況

塩崎悠輝 中村さんの報告で言われていた投票率が発表によって違うという話ですが、それはいつの時点での登録者数をもとにしていますか。今回の投票は2012年末までに登録している人までです。ただし、それ以降も登録作業自体は可能ですから、公示のときに何人登録しているのかと、2012年末までに登録していた人数とで違っていただけないでしょうか。

中村正志 「gov.my」のサイトですから、選挙委員会が運営しているはずです。私の報告では、その数字を使いました。選挙で用いられた数字のはずです。

塩崎 投票できる人の数ということですか。

中村 そうだと思います。

金子芳樹 いまの登録者数と前回の選挙の登録者数はもちろん変わっていて、とくに投票率が10%近く上がったということがポイントだと思います。登録された有権者数が前回の2008年の選挙からどのくらい増えたかについては、ざっとでいいですが数字はどうでしょうか。

中村 正確には覚えていませんが、今回が一千三百数十万人です。前回は一千二百数十万人だったと思います。すみません、はっきり覚えていません。

金子 その増えた分の内訳を探る資料はありますか。どのあたりの年齢層が増えたとか。増えた分の中身を

見ることによって、なにかがわからないかという観点からですが。

中村 手軽に見られる資料はありません。選挙委員会も持っているはずで、報道でもちらほら出てきたりはしますが、その資料にアクセスすることはそんなに簡単ではないです。

先ほど少し申し上げたように、今回の選挙の特設サイトが別にできていて、トップページから入って「ダッシュボード」というページがあります。そのページを見ると、今回のものについては選挙区ごとに有権者の性別の割合、年齢構成などの数字が出ています。今回については選挙区ごとに有権者がどのようなタイプかというデータはこれまでよりも豊富に公開されていますが、前回以前のものはありません。

伊賀司 今回は、若年層のとくに20歳代のファースト・ボーターが、報道によっては320万人という話も出ていますが、これについてオフィシャルな数字は選挙管理委員会などでは調べられないのですか。

中村 選挙管理委員会に行かれたことはあると思いますが、簡単に閲覧できるように資料が揃っているわけではないのです。むこうが整理したデータをくれることはありますが、我々がほしいのはざっくりとまとめたデータではありません。個別の選挙区ごとのさまざまなデータが見たいのですが、そこにアクセスするのは、私の経験ではむずかしかったです。

ファースト・ボーターの数字も、前回の選挙から去年の年末までに21歳になった人だけではないので、その内訳はわかりません。報道で出ていたものは、少なくとも私が見たものは、そのこの区別がされていない数字ばかりでした。

■ BNとPRのチェラマの特徴と

選挙運動におけるその重要性の変化

加藤剛 鈴木さんの発表と山本さんの趣旨説明からですが、選挙運動におけるチェラマはいつくらいの選挙から重要になったのでしょうか。

それと、チェラマのあり方がBNとPRで違う——ようするにBNは民族別にチェラマを開催する傾向があって、一方でPRは各民族から代表が出てくるということでした。そこで問題になるのは言葉だと思いますが、おそらくBNのチェラマは民族別の主催で民族の言葉を使っていると思います。ではPRはどうしているのか。みんながマレー語で話しているのか、あるいは各民族の代表が自分たちの言葉で話しているのか。もし後者の場合は、その言葉がわからない

人たちは、その現場でどうしているのか。

現場で「1マレーシア」を感じられる選挙キャンペーンはPRのほうということですね。みんなが共有できるマレー語で話しているとすれば、演説の場合は違うかもしれませんが、民衆の反応もずいぶん違うのではないかと思います。そのあたりについて、どういう言葉だったかということと、印象を教えてもらえたらと思います。

鈴木絢女 BNとPRでチェラマのあり方が違うという話について、私は違うと思っていないのですが、違って見える理由は、PRは3党合同で大々的な集会をします。それによって、「自分たちはこんなに支持を得ているのだ」ということを見せつけて、それをインターネットで配信するので、民族横断的のように見せることが多いんです。

他方でBNは、複数の民族が住む地域でチェラマをした場合にはいろいろな民族が集まりますが、そこで使われる言語はマレー語で、たまに英語が出てくるという感じです。先ほどPRは3党合同で大規模な集会をしようと言いましたが、BNはあまりそういうことはしません。そこで一見PRは民族横断的にしていてBNはそうではないと見えるのかもしれません。

しかし、PRも各党のチェラマになると非常に民族的になります。たとえばPKRのチェラマに行ったらマレー人しかいないんです。そういうところでは、先ほどもお話ししましたが、「国家のトップ10の金持ちが華人ばかりではないか」という議論も出たりします。当然そのときの言語はマレー語です。

他方で、DAPのチェラマでは圧倒的に華人が多く、全編が華語です。たまに「自分は華語を話せません」という人が英語を話すことがあるくらいです。

塩崎 チェラマは、PASは1980年代からしています。その前にABIM(マレーシア・イスラーム青年運動)が1970年代に始めたのがマレーシアでは最初です。ABIMもインドネシアから借りてきたのではないかと私は思っていますが、マレーシアで見られるのは1970年代からです。大きいもので参加者は数千人から数万人です。PASでもチェラマの9割はマレー人がマレー語だけでしています。

鳥居高 チェラマは1969年の暴動のあとといったん政治集会が禁止されて、その変形というかたちで1974年の選挙から出てきます。屋外集会は禁止になったので、村長なら村長の家に集まって、外から見れば明らかに集会だけれども、「これはチェラマだ」という

ことで通してしまうというかたちで、1974年の選挙から使っています。

■ ファースト・ボーターの影響と

インド系住民の投票行動はどうだったのか

伊賀 今回の投票行動はまだ正確にはわからないし、データもすぐにはとれないと思うので、印象論ということでお聞きしたいと思います。先ほど申し上げましたが、今回は若年層のファースト・ボーターがたくさんいました。これらの人たちがどの程度動いたのかについて、前回の選挙だと「インド系がPR支持に動いた」と言われましたが今回はどうだったのか、その二点をお聞きしたいと思います。

中村 今回、私は現地に行っていないので観察した結果は鈴木さんからお話しいただくとして、年齢別の投票行動はデータからはつかまづらいです。選挙区によってぜんぜん年齢構成が違ふとかいうものではないので。若年層はPR支持者が多いと言われていますが、実際どうだったのか。

インド系の投票行動も、数字で捉えようとするとかまづらいいんです。今回はかなりBN支持に戻ったと言われていますが、結局、選挙区に対するインド人票の割合はどこも低くて、ごく少ないところばかりがサンプルにたくさんあります。そこでインド人票の比率が若干違ったからといって、得票率には反映されないからつかまえられる。マクロの集約されたデータではつかまえられるし、ミクロのサーベイ・データはないので、実際のところはわかりません。

鈴木 各党の選挙区の選挙対策事務所に行くと、自分の選挙区だけですが、細かいデータがあります。投票所も、年齢別で部屋が違います。だいたい学校で投票しますが、「20歳代の人はこの教室、30歳代の人はこの教室に行ってください」というように投票するので、選挙区に張りついてボランティアをしたり、政党関係で活動したりしている人は全部わかるはずですよ。それを待つしかないというのが正直なところです。

ただし、行って見て、スランゴール州やクアラルンプールでお話しした感じでは、インド人有権者の行動はつかまづらいいということがあります。彼らはあまり言いません。華人はおそらく7割以上がPR支持でした。そして、ファーストタイム・ボーターも、私がお話しした限りではほとんどPR支持でした。

伊賀 インド人関係で言うと、選挙直前に、Hindraf(ヒンドゥー権利行動隊/ヒンドラフ)の取り込みをナジブがしました。メインストリーム・メディアもオン

ライン・メディアも大々的に報道しました。そういうことは投票行動に影響を与えるのかなとも思うのですが、いかがでしょうか。

鈴木 Hindrafの問題が集会で出てきたのは一回だけで、それはナジブが「おれたちにはHindrafもついているぞ」と、いかに民族融和的かを言っただけです。他のところではHindrafという単語を聞かないくらいイシューではなかったような印象です。

どちらかというと、私が見ていた選挙区のインド人たちは、民族の利益が閣議で代表されるという意識よりは、汚職とかそちらに反応していたような印象をもっています。「インド人がどちらに投票した」ということが「インド人として利益を代表するためにどちらかに投票した」ということとどう関係があるのかは慎重に考えなければいけないと思います。

■ 華人が総人口の3割を切ったことによる

パワー・シェアリングへの影響は

鳥居 二つほど教えていただきたいと思います。一つは先ほどからの質問に出ている有権者数の問題です。山本さんの資料だと総人口のうち華人がとうとう25%になったということですが、有権者レベルでも人口構成が変わっているのか変わっていないのか、おわかりであれば教えてください。

マレーシアにおいて華人人口が3割を切ってしまったとすると、有権者レベルでもそういう状況なのでしょうか。

中村 登録有権者全体に占める華人の割合は公表されていません。選挙区ごとの数字から割り出して足し上げれば概算できますが、私は計算していないのでわかりません。

鳥居 中村さんが出されたパワー・シェアリングの問題の話と関連して、総人口の3割というのは、社会集団として無視できない数字だと思います。他方で3割を切ったグループは無視されがちになるので、有権者との関係で聞いておきたいと思いました。

■ 半島部とは別の政治空間であるサラワク州で

SUPPの敗北をどう捉えるか

鳥居 サラワク州に関して、これまでと同じように半島部とは分かれた政治空間として今回は見ていいのか、仮に見ていいとしたらSUPPがこんなに負けた理由はなんなのかを教えてください。半島部と連動というかたちではないのですか。あるいは、サラワク州独自のイシューがあってSUPPが負けたと理解すればよいのでしょうか。

中村 すみません。よくわかりません。ようは、明言するための材料がないのです。

サラワク州での下院選挙の結果は、前回の州議会選挙の延長線上のように捉えられているようです。州議会選挙でも、華人の多い選挙区で与党がけっこう負けました。なので、トレンドとしては、前回の州議会の選挙から続いていると言うことはできます。では、前回の州議会の選挙で変わったのはなぜなのかというのは、よくわかりません。

■ ナジブは民族包括的なリーダーか マレー・ナショナリストなのか

伊賀 鈴木さんにお聞きします。選挙に直接関係があるかは怪しいのですが、ナジブ政権は「1 マレーシア」の話をずっとして、これは民族融和という方向の話です。その一方で、ナジブ政権下では、UMNOのなかにPerkasa(プルカサ)のようなマレー・ナショナリズムの団体も出てきています。

ナジブは、外から見ると「1 マレーシア」と「マレー・ナショナリズム」を使い分けているように見えます。鈴木さんの報告でも「1 マレーシア」の話がありましたが、どう考えておられますか。選挙の一つの争点は民族の話でもありましたが、どうなのでしょう。

鈴木 ナジブはほんとうにインクルーシブな(民族包括的な)リーダーなのか、それともマレー・ナショナリストなのかということでしょうか。それは表に出てきていることだけではわかりません。UMNOとしては言えないからPerkasaに外注するということは間違いなくしているだろうと思いますが、それを断言する材料は私にはないです。

■ 一票の格差の解消が困難な状況下で 政権交代と二大政党制の実現はありうるか

山本 鈴木さんは「二大政党制はあるし、定着する」という話で、中村さんのお話は「でも、条件付きだ」とのことでした。仮にいま政権交代が起こってUMNOが野党になったら党が崩壊するかもしれないため、一回は政権交代が起こったとしても安定した二大政党制にはならないというのが中村さんの考え方だと思いますが、これについて鈴木さんはどう考えますか。

鈴木 マレーシアの選挙制度が小選挙区制であることを考えると、たとえばUMNOから離反者が出て――日本の自由民主党で言うところの小沢一郎のような人が出て、数十人単位で政党を作っても、そういう弱小政党が小選挙区制で勝つ見込みはかなり低いです。そうすると、「寄らば大樹の陰」で反対側にくっつ

くことがおそらく合理的な判断になるのではないかと私は思います。

中村 先ほどの話には舌足らずなところがあったのですが、今回の選挙を見て、一票の格差が大きすぎて、普通に投票しているだけでは政権交代は難しいと思ったということが前提としてあります。現在のBNのかたちが変わらないと難しいだろうと思います。

日本からの連想で、同僚などに「一票の格差がそんなに大きくて裁判にならないのか」と言われるのですが、「マレーシアには憲法裁判所がない」という問題以前に、選挙区割り自体が憲法に書かれているから違憲にならないのです。一票の格差がひどいのは間違いなのですが、このひどさを合法的にどうしたら解消できるのか。

現在は3分の2の議席をBNがもっていませんから、グリッドロック状態で改憲できません。与野党が合意したうえで選挙区割りを変更することはありえないでしょうから、現在の選挙区割りがずっと続きます。一票の格差が大きい状態がそのまま続くんです。その状態でBNが割れないのなら、政権交代はきわめて困難ではないかということが大前提です。

BNがいまのままで、それでも政権交代が生じるとしたら、それは半島部の農村部でUMNOが議席を大幅に失ったときです。そうなったときのUMNOは、もはや現在のUMNOとは違うものになっていると思います。あるいはサバ州やサラワク州の政党がこぞって鞍替えしたら、これも現在のBNではないということになります。政権交代が起こるのであれば、アクターの性質が変わることによって起こるだろうということです。それは現在あるBNやPRの姿とは違っているだろうと思います。

■ 与党有利な選挙区割り＝ゲリマンダリングと 一票の格差＝マルアポーションメントの問題

西芳実 選挙区ごとに一票の格差が非常に大きいという話があって、しかもそれは、半島部、サバ州、サラワク州の地域間の格差だけでなく半島部のなかでも大きな格差があるという話ですが、選挙区ごとに一票に大きな格差があること自体は、マレーシアではどのように捉えられているのでしょうか。

中村 このことについて話す前に、用語をはっきり区別する必要があります。英語でマルアポーションメント(malapportionment)という一票の格差の問題と、ゲリマンダリング(Gerrymandering)は別のものです。マルアポーションメントが一票の格差です。ゲリマ

ンダリングは、より細かい恣意的な区割りによって勝てるようにするということです。

マルアポーシオンメントについては、マレーシアの知識人は1970年代からずっと問題だと言ってきました。鳥居さんが書かれています、基本的には、新経済政策を入れるのと並行して半島部の農村部の議席の割合を増やしたんです。意図的に一票の格差を作りだしたことに對して、知識人のレベルではずっと前から問題視してきました。

現在、一票の格差の問題はネット・メディアで非常に注目されています。マルアポーシオンメントとゲリマンダリングがごちゃごちゃになっていて、ゲリマンダリングという言い方をよく見かけますが、主張の内容を具体的にみると、マルアポーシオンメントが問題だと指摘する意見が多いようです。

西 一般には、都市のほうが票が軽くて農村のほうが票が重いという感じになっているのでしょうか。

中村 マルアポーシオンメントですね。かつ、農村部はBNが強いので、実質上はBNを勝たせるためのしくみとして機能しているので、そこからゲリマンダリングという言い方がされるのかもしれません。

■ 民族混合区の割合の変更が 2008年、2013年選挙では裏目に

伊賀 私はフェイスブックに若い人とか自分がマラヤ大学で教えていた学生とかを何人か入れています。選挙が終わった直後には選挙の不正の話がバーツと出ていました。しばらくしてゲリマンダリングやマルアポーシオンメントの話が徐々に増えだしたことが今回のトレンドだと感じています。だんだん収まってきたというか、これまでマレーシアの知識人とかの話で出てきたことがフェイスブック上で拡がりつつあるという感じです。

塩崎 鈴木さんの発表にあったように、選挙区はゲリマンダリングでBNが有利なように決まっていますが、2004年の選挙の前に選挙区をBNが勝ちやすいように組み直して、そのときのゲリマンダリングによってかろうじて今回もBNが勝てたという議論だと思います。しかし、そのときの選挙区割りが裏目に出たところも多いのではないかと私は思います。

民族混合区で、BNはかなりの確率で勝てるはずでしたが、それが勝てなくなったのが今回の総選挙です。いまマレーシアで出ている話には「華人は華人の選挙区にまとめた方がBNのためではないか」という主張も見かけます。民族混合区の選挙区割りが今回

の総選挙でほんとうにそれほどBN有利に働いたのでしょうか。

鈴木 私はゲリマンダリングとマルアポーシオンメントを一緒にしていました。塩崎さんがおっしゃったように、2004年の前にしたのは民族混合区をできるだけ増やすということです。そこでは負けています。

でも、どうなのでしょう。マルアポーシオンメントとゲリマンダリングはそれほどきれいに分かれるものなんですか。ここが強いから「ここを一区に区切っ飛ばせ」という考えもありえるわけですね。

中村 ゲリマンダリングはもっと局所的な話だと思います。アメリカの、ゲリーという名の政治家が、自分が有利になるように区割り変更を繰り返しているうちに、選挙区が妖怪サラマンダーの姿に似たおかしい形になったことから生まれたことばですから。マレーシアで、政治的意図から局所的な選挙区割りの修正がされた例としては、DAPの支持者が多い地区が分断された例がいくつかの論文で指摘されています。

マルアポーシオンメントはもっと大きな括りでみたときの一票の格差です。マルアポーシオンメントは、必ずしも与党を有利にするものではありません。1970年代から農村部のマレー人選挙区の比率が高められましたが、それは1999年選挙では裏目に出ました。そこで2004年選挙では、マレー人区の比率を減らして混合区の比率を高めましたが、2008年と今回の選挙ではそれが裏目に出ました。

*

山本 鈴木さんが「社会が政治によって割れてしまった」と指摘していました。学校で子どもたちが「お母さんはどっちの政党を支持しているの」と言われているという話を聞いて、クランタン州でPASとUMNOの支持者がそれぞれ行くモスクが違うという話が思い浮かびました。関連した話は総合討論のときにでも参加者のみなさんから聞かせていただければいいかと思います。

中村さんのお話でいちばん強いメッセージは、「研究者が見ている枠組みや立場をもうすでに変えなければならぬかもしれない」というはっきりしたご意見でした。このことも総合討論の際に考えられればと思います。